

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520464

研究課題名(和文) 名詞の形式化・文法化にみる日本語の構文構造史

研究課題名(英文) A historical study on the formalization and grammaticalization of Japanese Nouns

研究代表者

宮地 朝子 (Miyachi, Asako)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10335086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本語では名詞由来の機能語が一大類型をなしつつ、否定極性を持つ助詞、(極性のない)限定の助詞、助動詞の3タイプに分化している。本研究では「切り>キリ」「外>ホカ」、の「丈>ダケ」、の文末名詞文等の史的過程を観察し、形式化・文法化の基盤となる構造と、機能語化とその分化の制約条件を考察した。その結果、新機能は形式化とともに進行する属性、量、除外等の名詞句としての意味特性の獲得が、分化には由来名詞の語彙的意味が、それぞれ強い制約条件となることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In modern Japanese, functional words derived from nouns are specialized into three types: particles with negative polarity, limited particles, and auxiliary verbs. In this study, we observed the constraints of formalization and differentiation at work in the process of historical change in functional words, kiri, hoka, dake and sentence final nouns, and we considered the structure underlying their grammaticalization. As a result, the following two points were revealed: First, the acquisition of new grammatical features occurs in parallel with the acquisition of different meaning properties as a noun phrase, such as attributes, quantities and exclusions. Second, the specialization of functional words has been greatly affected by the lexical meaning of the original noun.

研究分野：日本語学

キーワード：国語学 文法化 助詞 助動詞 非存在文 叙述 形式名詞 とりたて

1. 研究開始当初の背景

現代日本語の機能語においては、名詞由来形式が一大類型をなしている。現代日本語の「形式的な名詞」の諸機能や関連の言語事実については早くから記述観察があり、現代語文法研究ではこれに基づいて、形式名詞、形式副詞、とりたて(助)詞、接続助詞、助動詞といった分類がなされ大きな研究蓄積を得た。しかし、この見方は、多くの同音異義形式を認めるのみならず分類の立場の違いによる品詞論的対立を解消できないという問題点があった。同一形態の多機能の根拠や分化のメカニズムについても説明はなされてこなかった。

90年代以降、補文・関係節の分析、コンピュータ文・名詞述語文研究など、名詞句の意味・構造に関する考察が蓄積を得てきた。研究代表者は、この名詞句の持つ意味・文法的多様性に注目し、名詞から機能語への形式化・文法化という観点を立てた。この見方に拠れば、離散的に扱われた個別の現象面を包括的に把握し、共時的な多機能や歴史地理的動態として、また構造的な問題として把握できる。さらに、この問題設定は「どのような名詞が形式化しどのように個別の文法化を果たすのか」「形式化した名詞になぜ用法の幅があるのか」また「なぜ近現代語で体系的参与が要請されたのか」といった関連課題の解明に寄与できる。

研究代表者はまず「形式名詞の文法化」という観点により、文法化した形式名詞の振る舞いを追究してきたが(平成19-21年度若手研究(B)19720105)、その過程で、形式化以前の名詞の語彙的な制約が大きく関与しているとの見通しが強まった。そこで上記の問題意識をより適切な形で再設定したのが本研究課題である。(最終年度前年度応募により採択)

2. 研究の目的

日本語の名詞の形式化・文法化現象に着目し、その動態・変化を支える普遍・不変の構造に迫る。文法化を果たした要素は現代共通語において「形式名詞」「形式副詞」「～助詞」「～の助動詞」などと称されるが、本研究ではその分類をひとまず措き、現代日本語において名詞から文法要素までの多機能を持つ形式を取り上げる。「名詞の形式化>文法化」という把握のもと、その歴史・地理・共時的な多機能の動態を現象面から観察分析して、個々の名詞の形式化・文法化の過程やその方向性、制約条件について考察する。名詞としてどのような用法・機能が実現可能かを明確にしなが、個別名詞の語彙的意味による制約条件、変化の基盤となる構造条件、また語用論的条件の相互作用として合理的説明を目指す。これにより、現代日本語に顕著な名詞類の文法形式への体系的参与、また名詞由来形式の共時的な多機能がいかにか実現するかを問いなす。

3. 研究の方法

名詞の形式化に見られる分化の類型は、現象面の変化の在り方に基づいて、以下の三タイプに整理できる。3タイプそれぞれの変化にどのような過程が認められ、どのような制約条件があるかについて、観察分析する。

- (1) キリ・ホカなど：相対名詞の形式化・文法化(1)：否定文環境での文法化のパターンとして。肯定述語、累加用法の確立と否定極性のとりたて用法の確立の関係や方言差の生じる制約的要因についても考察する。
- (2) ダケ・バカリなど：相対名詞の形式化・文法化(2)：否定極性を持たない要素の文法化のパターンとして。焦点解釈を持つ過程に注目する。
- (3) ハズ・モヨウ・モノなど：普通名詞の形式化、文法化のパターンとして。形式化・文法化において「～はずがない」のような「非存在文主語位置」等否定の関わる構文環境の要否に注目し、その構造的示唆をとらえる。

この観察をもとに、名詞の動態を日本語の構造的な問題としてとらえ直し、個々の現象を「名詞」「形式化」「叙述構造」といった一般的な構造によって説明することを目指す。理論的構造分析による成果との整合性をみながら、制約要因についても、語彙的意味、構造的条件、名詞の意味特性とその文法的性質、語用論的条件の相互関係により推定し、合理的な説明を構築する。

考察に当たっては、いずれのタイプにおいても、①名詞の性質と連体構造の相互関係、また関連する構文環境として②存在文・非存在文や叙述構造との関連性、③否定・数量詞のスコープの広狭と、①②③すべてに関わる再分析・類推の作用といった観点が重要になる。

主に研究代表者による現象面の整理から、名詞の形式化にみられる分化の類型を極性やこれと連動する構文構造のタイプの仮設的整理に帰結し、研究分担者の理論的構造分析による成果との整合性をみながら、構文構造とその変化を念頭におきつつ説明力と汎用性を担保した仮説的説明を提示する。

4. 研究成果

研究期間を通じて、対象となる形式の用例採集、調査を進め史的現象面の把握蓄積の精緻化を進めるとともに、以下の具体的成果を得た。(5. 主な発表論文等参照)

(1) キリ・ホカについて

①いずれも範囲を表す名詞としての用法から、期限、累加、除外等の副詞句構成を経て、叙述名詞句構成用法からの接続助詞化(キリ)、副詞句構成での項名詞との同一指示解釈ののち、否定文環境での再解釈により、否定極性のとりたて、あるいは係助詞というべき文法性を備えた助詞への変化を果たした

と考えられる。範囲はすなわち空間量であり、量の名詞句構成が文法化の重要な継起的段階として把握できる。と同時に、キリの期限といった時間的意味の獲得、接続助詞の用法の獲得などは、その語彙の意味によって方向付けられ条件付けられたものと考えられる。この点は、すべての対象名詞の観察において得られる示唆である。

②現代語において累加用法と否定極性用法を併せ持つホカ句の現象面について、語彙的な意味特質と、論理的な主部と述部が構造的に姉妹関係をもつ「叙述」という構造関係から整合的に説明した。

(2) ダケについて

①形式化・文法化の過程において、尺度を表す名詞から、叙述名詞句構成（複文の従属節構成）、量の副詞句構成、項名詞句との同一指示解釈を経て、焦点の機能語となり、助詞化するという過程が認められた。名詞句の多様な意味機能とその文法性、さらに相互関連性の把握整理に大きな示唆をもたらす成果といえる。

②一方、ダケノ句の様相においては、副詞句構成用法獲得ののち拡大発達が認められた。副詞句の名詞性という観点からも、名詞の文法化の段階性を考察する観点の必要性が看取できる。

(3) 文末名詞の類について

特に中古語の文末名詞文について記述観察し、現代語の文末名詞文との異なりと共通点を考察した。意味上、主語≠文末名詞であるこの構文は、名詞修飾節を含む複文構造とする立場もあるが、主語が多く主題句をなすほか、文末名詞に前接する述語でなく、文末のコピュラにおいて係結の曲調終止が見られることなどから、文末の名詞がコピュラとともに助動詞として機能する単節構造と見る立場を支持する結果が得られた。本研究の仮設する「叙述」構造との関係性をさらに追求する余地がある。

(4) 日本語の構造的性質とその理論的検証

現代日本語文法論において「とりたて」あるいは係助詞との位置づけがなされる機能語の統語的位置づけを説明するにあたって、本研究では論理的主部と述部を基盤とする「叙述」という構造を仮説的に設定した。その説明の構築と、理論的検証について、主に研究分担者が担当し、スペイン語等との比較対照も踏まえて言語の普遍特質と個別特質の関係を整理しながら構造的な追究を行った。先端的な科学的仮説演繹法を参照援用して理論構築と検証を行うことで、説得的な議論を蓄積した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

(1) 片岡喜代子 「否定文の言語的意味と発話における制約」『九州大学言語学論集』35、2015.3、347-362.（査読なし）

(2) Asako Miyachi. 'Mermaid Construction in Old and Early Middle Japanese.' Tsunoda, Tasaku (ed.) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Nouns*. (NINJAL Collaborative Research Project Reports.), 13-01, 2013.4, 179-220.（査読あり）

(3) 宮地朝子 「書評論文 青木博史著『語形成から見た日本語文法史』（ひつじ書房、2010年）」、『日本語文法』くろしお出版 12(1)、2012.3、30-138.（依頼かつ査読あり）

(4) Kiyoko Kataoka. Review. 'Expression and Interpretation of Negation: An OT Typology.' By Henriette de Swart, *Studies in Natural Language and Linguistic Theory* 77, Springer, Dordrecht, Heidelberg, London, New York, 2010, xvii+279pp. *English Linguistics* 29: 1, 2012, 155-165.（依頼論文且つ査読あり）

(5) 片岡喜代子 「言語の普遍的原理と個別特質—日本語とスペイン語の否定関連現象から—」 *KLS 32. Proceedings of the ThirtySixth Annual Meeting* (June 11-12, 2011). *Kansai Linguistic Society*. 2012, 61-72.（査読あり）

(6) 片岡喜代子 「否定関連現象から見た日本語とスペイン語」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究第2号』2012、113-130.（依頼論文）

(7) 齊藤学、崔榮殊、戸次大介、片岡喜代子、川添愛 「言語情報の確実性アノテーションのための韓国語の様相表現の分類—韓国語の証拠推量表現と認知的推量表現—」、*中華日本研究*第3号、2011、17-40.（査読あり）

(8) 片岡喜代子・宮地朝子 「ホカとシカの意味特質と統語的条件」*日本言語学会*第142回大会（2011年6月18、19日）予稿集 2011、170-175.

(9) 片岡喜代子 「否定極性と統語的・意味的条件—日本語記述に基づくスペイン語否定現象再考—」 *HISPÁNICA* 第54号 *日本イスパニヤ学会*、2010、43-65.（査読あり）

(10) 川添愛・齊藤学・片岡喜代子・崔榮殊・戸次大介 「言語情報の確実性アノテーションのための様相表現の分類」九州大学言語学研究室編『九州大学言語学論集第31号』、2010.8、109-129.（査読あり）

(11) 宮地朝子 「(書評) 沼田善子著『現代日本語とりたて詞の研究』」『日本語の研究』6(3)、2010.7、144-150。(依頼)

〔学会発表〕(計 8 件)

(1) 宮地朝子 「江戸・東京語のダケの歴史的展開」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語文法の歴史的な研究」(プロジェクトリーダー・青木博史) 公開研究会、2013年9月27日、成城大学。

(2) 宮地朝子 「名詞の形式化・文法化と複文構成—ダケ・キリにみる—」、国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」共同研究集会(プロジェクトリーダー: 益岡隆志)、2011年9月11日、於: 名古屋大学(依頼)

(3) 片岡喜代子 「否定関連現象から見た日本語とスペイン語」、『外国語と日本語の対照言語学的研究』第4回研究会 東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門、2011年7月16日、於: 東京外国語大学(招聘発表)

(4) 片岡喜代子・宮地朝子 「ホカとシカの意味特質と統語的条件」、日本言語学会第142回大会、2011年6月18日、於: 日本大学文理学部(査読あり)

(5) 片岡喜代子 「言語の普遍的原理と個別特質—日本語とスペイン語の否定関連現象から—」、関西言語学会第36回大会、2011年6月12日、於: 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス(査読あり)

(6) 川添愛・齊藤学・片岡喜代子・崔榮殊・戸次大介 「様相・否定・条件表現の言語学的分析に基づく確実性判断のためのアノテーション済コーパスの構築」、言語処理学会第17回年次大会(NLP2011)、2011年3月7日、於: 豊橋技術科学大学言語処理学会(大会優秀発表賞受賞)

(7) 宮地朝子 「日本語の体言締め文の歴史」、国立国語研究所共同研究プロジェクト第4回共同研究集会、2010年10月16日、於: 国立国語研究所(国際)

(8) 宮地朝子 「山田孝雄「喚体句」着想の淵源」、名古屋大学グローバル COE プログラム第9回国際研究集会「ことばに向かう日本の学知」、2010年9月10日、於: 名古屋大学

〔図書〕(計 8 件)

(1) 宮地朝子 「名詞の形式化・文法化と複文構成—ダケの史的展開にみる」益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、2014.1、

(2) 宮地朝子 「山田孝雄『日本文法論』のテキスト布置」、松澤和宏編『テキストの解釈学』水声社、2012.3、319-350。

(3) 釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房、全320頁、2011.11。

(4) 宮地朝子 「山田孝雄「喚体句」着想の淵源」、釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』、ひつじ書房、2011.11、49-77。

(5) 宮地朝子 「名詞キリの形式化と文法化」、青木博史編『日本語文法の歴史と変化』、くろしお出版、2011.11、215-238。

(6) 片岡喜代子 「否定極性と統語的条件」、『否定と言語理論』、加藤泰彦ほか編、開拓社、2010.6、118-140。

(7) 宮地朝子 「日本語否定文と文法化—シカ類の変化と変異を中心に—」、『否定と言語理論』、加藤泰彦ほか編、開拓社、2010.6、170-192。

(8) 宮地朝子 「ダケの歴史的変化再考—名詞の形式化・文法化として—」、『日本語学最前線』、田島毓堂編、和泉書院、2010.5、425-446。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮地 朝子 (MIYACHI, Asako)
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 10335086

(2) 研究分担者

片岡 喜代子 (KATAOKA, Kiyoko)
神奈川大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 80462810